<table>
<tr><td colspan="4">令和２年度　第２回　高浜市誌編さん委員会</td></tr>
<tr><td>日　時</td><td colspan="3">令和３年３月１７日（水）１３時半～１５時</td></tr>
<tr><td>場　所</td><td>いきいき広場　会議室Ａ</td><td>傍聴人数</td><td>０名</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出席者</td><td>委員</td><td colspan="2">神谷純一
曲田浩和
石川　伸
萩原敏和
村松輝一
後藤恵理
宮田克弥
中川健二
尾崎ヒロミ
神谷坂敏</td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="2">こども未来部　部長　木村忠好
文化スポーツグループ　リーダー　鈴木明美
同　主任　日吉康浩
同　主事　広瀬　舜</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">株式会社ぎょうせい　土屋和重</td></tr>
<tr><td>次　第</td><td colspan="3">１　あいさつ
２　議題
（１）各部会活動の活動状況について
（２）たかはま 歴史・まちづくりシンポジウム報告
（３）『高浜市のあゆみ資料④』の進捗
（４）市誌編さんの総括及び令和３年度以降の取り組みについて
３　その他</td></tr>
<tr><td>資　料</td><td colspan="3">資料１　各部会の主な活動状況
資料２　たかはま 歴史・まちづくりシンポジウム報告
資料３　『高浜市のあゆみ資料④』の進捗状況
資料４　市誌編さん５年間の総括・令和３年度以降の取り組み案</td></tr>
</table>

令和２年度高浜市誌編さん委員会【第２回】

令和３年３月１７日（水）

１．はじめに

【神谷純委員長】先日のシンポジウムには約７０名が参加された。これから刊行する市誌を、どう活用していくかが今後の課題となってくるかと思う。「高浜ってどこにあるの？」「高浜ってどんなまち？」と、県内の人にさえ聞かれる。また、「高浜おまんと祭り」は広く知られているかと思うが、その他の歴史的なことについては、なかなか知られていないのが高浜市であると思う。今回の市誌についてはそういった点をふまえ、子どもたちも含めた市民のみなさんが読みやすい・わかりやすいものをといったことで編集がすすめられている。後ほど曲田先生からもお聞きできるかと思う。

小学校の社会科で、「のびゆく高浜」を活用し地元について学ぶ授業があるが、そういったところでも活用してもらえるような市誌になるといいと思う。編集に携わった方々を招いて、子どもたちにより詳しく話をするといった機会もつくることができれば、まちに対する子どもたちの興味も高まってくるだろう。子どもが興味を持つと親にも伝わっていくということがあるので、その点も含めて今後活動をしていけるといいと思う。

ページ数の関係で掲載しきれなかった内容もあるということで、そういった内容や、より詳しい内容をまとめたものが別冊のかたちで、すでに刊行され始めている。この場でも、こういったものがあるといいという意見を出していただければ、今後の参考になると思う。約５年間にわたった編さん事業だが、この夏に出版予定だと、先日のシンポジウムでも話があった。本日もたくさんのご意見を頂戴したいと思う。

２．議題

（１）各部会の活動状況について

＜事務局　資料１に基づき説明＞

※特に意見なし。

（２）「たかはま歴史・まちづくりシンポジウム」報告

＜事務局　資料２に基づき説明＞

【委員】先日のシンポジウムでは「聞き書き」の手法の話が出たが、実際に公開聞き書きのような場面を設けて、実際にその様子を見せることができたらいいと思う。体験したことがない人は、どうやって

話を聞きだしているのかがわかると、もっと興味がわくのではないか。

【神谷純委員長】講演をしていただいた佐野先生から、今後はぜひ市民のみなさんで聞き書きをという提案もいただいたが、それに向けて学習ができるような機会をつくっていただくとよいかと思う。

【委員】実際に目の前でやってみるというのは非常に良いと思う。そういった聞き書きについての勉強会等の機会を設けて、その後実践に移していけると良い。

【委員】地域のなかでも、特に高齢者に色々なことを聞いてあげることが大事。そうすると資料や写真の提供に結びついてくる。昔の話を聞いてほしいと思っている人はたくさんいると思う。アンケート結果にも書いてあるが、自分も資料をデータ化してほしいという要望がある。高浜の広報は昭和２９年がはじまりだが、それ以前のことはなかなかわからない。また昔の新聞についても、高浜市を含め近隣の図書館にはあまり古いものがなく、資料がなかなか見つからなく苦労している。そういった面で、郷土資料館にあるデータで公開できるものは公開して、検索・閲覧できるようにしていけば、郷土の歴史について関心を持つ人が増えると思う。例えば安城市の図書館のホームページからアーカイブを見ると、昔の本や地図も見られる。そういったものを高浜でも整備し、見られる形にしてもらいたい。

【委員】第１部の聞き書きのお話が非常に興味深かった。聞き書きを、まちづくりをする上での手法として取り入れたら良いのではと強く感じている。市民のみなさんがうまく聞き書きを活用することができたら、先人の想いなどがよりまちづくりに反映できるのではないかと思う。

【神谷純委員長】今の子どもたちは、一人一台タブレットが配布され、授業に取り入れられている。また小学校で英語の授業がはじまるなど、この数十年間は大きな変化の時代だと思う。そういったところで、この大きな変化について、聞き書きを使って記録を残すことができれば、将来非常に大切なデータになると思う。

【委員】聞き書きをして、記憶を記録として残していくべきだと思う。例えば今現在で言うなら大正生まれの方などはかなり高齢になっている。何もしなければ、その方の貴重な記憶がそのまま失われてしまう。亡くなってしまっては、もう何も聞くことができなくなってしまう。

【委員】また今度聞けばいいと考えるのではなく、その時に聞いておかないとどうなるかわからない。古写真も同じ。一度見せてもらったもので、再度見せてもらおうと訪ねると捨ててしまっていることもある。毎回毎回が一発勝負だと思ってやらないといけない。自らまちのことを知ろうとして、常にアンテナを張り巡らしている市民が各小学校区に複数いれば、かなり盛り上がると思う。チームワークができて、色々な情報が集まってくる。市内に一人や二人ではなかなか難しい。何気ない生活の風景を撮影した写真は個人が持っている。学校や市役所が持っているのは行事だとか、その当時あった建物といったものだけで、生活に根付いた写真は持っていない。そういった資料を掘り起こす人がもっといないと、知らないうちに捨てられてしまう。自分もずいぶん集めたが、もっとたくさん眠っていると思うので、

次の世代にまちの記録を残すチームをつくったほうがいい。それがゆくゆくは、また何十年か先に新しい市誌をつくるときの基礎資料にもなると思う。

【委員】今提案されたことは、若い世代に興味を持ってもらわないとなかなか続かないと思う。近現代史のみならず、もっと古い時代についても市民のみなさんに興味を持ってもらえるような環境づくりをするべき。これまで開催してきたようなシンポジウムもその一つで、継続的な取り組みとしてやっていただけるといいと思う。もしまた４０年後に市誌をつくるとなった時、今回編さんに関わった委員全員がまた関わるということはまずできないと思うが、シンポジウムは人が変わっても継続していける。また、シンポジウムの成果も含めたまちの記録がデータとして蓄積されていけば、次に編さんする時の大きなバックデータとなる。

【委員】自分が集めた約１０万枚の写真データも、次の世代にどう残していくのかというのが課題。個人・行政・まち協など、さまざまなところで共有して保管すればいいのかもしれない。

（３）『高浜市のあゆみ資料④』の進捗

＜事務局　資料３に基づき説明＞

【委員】古い家を壊した際に資料が発見されることもあるので、こまめに地域を見ていないといけない。市内で昔の細工人形や菊人形の資料がみつかると、まず今回の執筆に携わっている調査員さんに質問したり、情報提供する。そういった関係を築くことは、情報が特定の個人に集中してしまうのを防げる。

（４）市誌編さんの総括及び令和３年度以降の取り組みについて

〈事務局より　資料４に基づき説明〉

【曲田副委員長】シンポジウムやこの会議の場で、完成した市誌をみなさんに披露できればよかったが、コロナウイルスの蔓延などもあり、刊行時期の変更を余儀なくされてしまった。刊行は今年の夏頃ということで、ご理解いただきたい。どこの市町村でも、市誌の編さんが終わればその調査・執筆に関わった組織も解散するというのが普通である。なぜ次年度以降も編さん委員会委員として活動を行うのかというと、自分や各部会長が市民のみなさんが今回の市誌を活用してくれること、また掲載しきれなかった内容を少しでも市民のみなさんへ伝えたい・残したいという思いが強いからである。シンポジウムにご参加いただいた方は、各部会長の熱を感じられたかと思う。ただし、本編の発刊をむやみに延ばすわけにはいかないので、印刷のみ令和３年度となってしまうが、取り組み自体は令和２年度で区切りをつけ、次年度からは次の目標のことを考えていく。今後の調査・執筆にかかる実働部隊あるいは提案する存在として自分や部会長が入りながら新しい編さん委員会を組織していく。

先ほどから聞き書きの話が出ているが、これにも非常に難しい課題がある。佐野先生は社会学の手法

をとって聞き書きを行ってきた。人重視で実施してきたので、個人のライフヒストリーのような作品ができあがる。今後はそれを内容重視に変えていく必要がある。今回の市誌でも、最後の編集のところで試みたのだが十分にできたとは言い難く、この部分は佐野先生も非常に心残りだったと思う。実はその裏では、現代史部会の部会長である高木さんが、歴史学・民俗学的な手法を用いた聞き書きを行ってきた。それらをドッキングさせると、これまでよりも確実性が増した内容のものができる。以前、聞き書きについて意見をいただいたことがあり、それは検証の部分である。つまり、ひとりの方の話だけだと、誇張した内容も含まれてしまうのではないかということ。それは私も危惧している。一人の方の話をどのように検証していくかが大事で、複数の人に対して同じ話題で話を聞けば、ある程度検証することができるのである。これは今後行っていかなければいけない。昔のことをよく知る方が亡くなっていってしまうとわからなくなるので、お話を聞けるうちにとにかく多くの方の聞き書きを集めて、それを組み合わせることで検証していきたい。佐野先生のやり方がよかったのは、基本的には方言まで一字一句すべてひろっていったことである。民俗調査の聞き書きの場合は内容を重視して、その分野の詳しい方に話を聞いて内容をまとめていく形をとる。その方法を最初からとらなかったことが、この高浜市誌の特徴のひとつでもある。ただ、内容を検証していくことはまだまだ不十分であり、そこが佐野先生の心残りの部分だったと思う。

他の部会長にもそれぞれ心残りはあるが、かと言っていつまでも携わるわけにもいかないので、どこかで区切りは決めて、その後は市民のみなさんに引き継ぎ活動していただきたいと思っている。このように、他に例がない形で調査・執筆に関わった委員が残り、携わらせていただくということを、ここでご報告させていただく。もう一点、隣の安城市は昭和３０年代に旧市史ができた後、その執筆の元となった資料が散逸してしまった。その反省から、新しい市史の編さんが終了した後は、歴史博物館のなかに資料室ができた。これは高浜市も見習うべきことだと思う。今回整理した膨大な資料、執筆に用いた基礎資料をどう保管して活用していくかを考えていかなければいけない。すぐにできるわけではないと思うが、村松委員が持っている約１０万点の写真データも含めて、どう引き継いでいくのか。旧高浜市誌の基礎資料である杉浦茂治さんが収集した資料は、確かに保管はされてきたが、それは引き継がれたとは言えない。そういった反省も含めて、どのように次の世代につなげていくのかを真剣に考えていきたい。

【委員】村松委員の写真の話があったが、現像した写真の他にネガもあるので、ネガスキャナーでデータ化してもらいたい。そうすればパワーポイントで活用したりできるので、写真の収集に合わせてネガの収集・データ化もやっていけると良い。

【委員】これまで編さん委員として関わらせていただき、のびゆく高浜の編集も含めて市全体のことを知るいい機会になった。高浜小学校の建て替えにあたって、古い写真やたくさんの資料が出てきた。そ

れらは年代順にまとめるということしかできなかったが、今年刊行される『碧海の今昔』という本の調査を受けた際に提供することができた。こういったことの積み重ねが、今後活きてくるのではないかと思う。教員になりたての２０代の頃は、杉浦林蔵先生のご自宅にお邪魔して調べものをしたり、聞き書きのようなこともした。今後もシンポジウムに参加したり、ボランティア的な活動に参加するなど、何らかの形で関わっていけたらと思う。

【委員】先日のシンポジウムでは、聞き書きに携わった大学生や多くの調査員の方々の、とても大きな思いや力を感じた。そういった方々の努力の結晶として市誌が出来上がるということは、非常に素晴らしいこと。今日、次年度以降の取り組みの話を聞き、はじめは成人の方を対象とした事業かと思っていたが、子どもたちも巻き込んで、高浜市について学んだり考えたりするチャンスがあるのではと感じた。子どもたちに高浜市のことを知りたいと感じてもらうには、夏休みの宿題などがきっかけになっると思う。学校のカリキュラムも大変だとは思うが、そこでなんとかのびゆく高浜と合わせて新しい市誌も活用して、高浜市を好きになる子どもたちが増えていったらいいと思う。

【委員】これまで市誌編さんに関わらせていただけたこと、非常にありがたいと感じている。私自身、今は市外に住んでいるが、母が高浜市出身で、母から聞いた昔の話を重ね合わせながら高浜市には愛着を持っている。市誌編さん委員という立場はここで区切りとなるが、今後も市誌編さんについては側面からサポートさせていただければと思っている。経済界においても、歴史があってはじめて産業が成り立っているということを改めて認識しながら、高浜市が更なる発展を遂げることを祈念している。

【委員】お子さんから年配の方まで、例えばお祭りだとかそういうものの歴史を自分たちでできるだけ紐解き、思いや文化を後世へ伝えていってもらいたいと思う。高浜市には市外、県外からおみえになる方々もいるため、このまちに魅力を感じてもらえる、そして何より市民のみなさんが自慢できるまちにしていきたい。委員としての立場は終わるが、今後も助力していきたいと思う。

【委員】先ほど話題に出た『碧海の今昔』において、高浜市の写真のキャプション執筆に関わった。書くにあたってさまざまなことを調べたので、またそれを発表する場や、学校から要請があれば課外授業のような形で、昔の高浜のくらしや文化についてスライドショーで伝えるといった場があれば協力したい。資料を集めるだけでなく、そういった情報発信をしていかなくてはいけない。現在、たかぴあで行われているミニ展示があるが、もう一歩踏み込んで見てもらうためには、ただ展示するではなく、解説する人を配置するなどのしかけが必要ではないかと思う。今年度、市制施行５０周年の関連イベント『たかはまアーカイブス』で、市内に写真を展示する予定になっている。その展示では５０年前と現在とを見比べられるように工夫したり、解説を行うなどもしていきたいと考えている。自分にできることをできるうちにやっていきたい。

【委員】この市誌編さん委員会に参加させていただき感謝している。「高浜のことを知らない私が・・」

などと最初は思っていたが、先日のシンポジウムにも参加してみて、高浜市外の方が高浜市のためにとても頑張ってくださっているということを肌で感じた。パネリストとして登壇されていた粕谷さんが「高浜が好きだからできる」とおっしゃっていたことがとても印象的だった。これからできあがる市誌を、ぜひ子どもたちにも手に取ってもらい、そこに書かれているまちのあゆみを、つないでいってもらいたい。さらには、この市誌をつくった人たちの思いまで伝えて、使い続けていただきたい。

【曲田副委員長】今回の市誌は、「現代史重視のわかりやすいものにする」ということでプレッシャーがあった。現代史を重視すると、こういった会議では意見が割れたり、誰かが気分を害したりといった可能性も十分に考えられたが、そういったことがなく、スムーズに事業を進められたのはよかったと思う。今後、シンポジウムや別冊資料では古い時代も取り扱うなど、バランスを取りながら考えていければ良いと思う。

【神谷純委員長】今回の市誌は、聞き書きを取り入れ、現代を重視し、かつ市民にわかりやすく編集するなど、近隣の市町村史にはない特徴がある。これが良い結果だと判断されるのは、今後の活用次第だろう。子どもたちがこの本とその取り組みによってまちの歴史がわかってきただとか、市民のみなさんが自ら調べたり学んでみようという動きが起こってくれば、この事業は大成功だったという結果になるだろう。今後とも、さまざまな立場からみなさんにはご協力いただけるとありがたい。

【委員】委員のみなさんには長い期間ご尽力いただき、大変感謝している。まだまだ解析されていない資料がたくさんある。自分自身、例えば古文書を読むことができたらお手伝いできるのだがという気持ちはあるが、実際はなかなか難しい。ただ将来的に、古文書をスキャンすると口語体に翻訳されるようなシステムができるのではと、大いに期待している。そのためにも、今ある資料が散逸しないようにしっかり保管しながら、今後の取り組みにも力を入れていきたい。次年度以降、新たなかたちで発足する編さん委員会へのご助力をお願いしたい。